

目次／テーマ展 古・岩手のクロガネー発掘から見えてきた古代～中世の鉄文化ー表紙／いわて文化ノート 東北北部の古代赤彩土器～7世紀頃の赤彩文化を中心に～p.2-3／展覧会案内 テーマ展「古・岩手のクロガネー発掘から見えてきた古代～中世の鉄文化ー」p.4-5／活動レポート チャレンジ!はくぶつかん 平成30年度文化財等取扱講習会 p.6／事業報告 トピック展「今を生きる恐竜たち」 冬の写生会 p.7／インフォメーション p.8

テーマ展

いにしえ

古・岩手のクロガネ

発掘から見えてきた古代～中世の鉄文化

令和元年6月8日(土)～8月18日(日)



復元古代豎形炉による製鉄操業の様子(立子山たたら)

南部鉄器や橋野高炉跡など昔から鉄生産地として有名な岩手県ですが、これまで様子が不明だった中世以前。近年の復興関連等の発掘調査で、多くの鉄生産関連遺跡が発見され、いにしえの鉄生産の様相が明らかとなってきました。

本テーマ展では、主に沿岸部で出土した資料を中心に、県内の最新情報を紹介し、発掘成果から見えてきた岩手の古代～中世の鉄生産の技術的変遷と系譜を辿ってみます。

■いわて文化ノート

■東北北部の古代赤彩土器 ～7世紀頃の赤彩文化を中心に～

専門学芸員 米田 寛

■はじめに

古代遺跡の発掘調査をすると、赤い顔料を塗って焼かれた土器が出土することがあります。考古学ではこのような土器を赤彩土器と呼んでいますが、墓や建物に残された沢山の土器のなかで、ごく一部が赤く塗られているのです。

最近、東北北部に分布する古代赤彩土器を集成し、当時の人々がどのような目的や効果を狙って赤く塗ったのか検討しております。ここではその成果の一端をご紹介します。

■太古の赤色文化

日本では、後期旧石器時代から赤色顔料が利用されています。今から2万年以上前の北海道千歳市柏台1遺跡では赤い鉄鉱石を磨りつぶして顔料を作り出した跡が見つかりますし、同じ北海道知内町湯の里4遺跡の墓には、死者の弔いのために赤色顔料が散布されました。

縄文時代以降も、赤色顔料を敷き詰めた墓穴が数多く見つかっています。葬送儀礼に欠かせなかった赤色顔料は、次第に用途が広がり、一部の日常道具を鮮やかに彩る絵具にもなりました。木製品や土器への顔料塗布がそれです。木地や土器の素地には漆に顔料や酸化物を混ぜた赤漆や黒漆が塗られましたが、漆顔料には光沢のある鮮やかな彩色ばかりでなく、保護膜・防腐の効果もあったようです。一方で漆顔料を使って多彩な文様が描かれており、それらの文様には呪術的な意味も込められていたことでしょう。

古墳時代に入ると、埴輪や墳墓の石室内部に赤色文様を描く装飾古墳が造られました。赤色文様には魔除けの意味が込められていたと考えられており、古墳時代になっても赤色と葬送儀礼は密接な関係にあったとされています。

■古墳～平安時代の東北北部の赤彩土器

東北北部の古代赤彩土器も葬送儀礼との関係が強く、5～6世紀の墓の副葬品として数多く見つかっています。一方、集落遺跡の建物の中からも、赤色顔料の塗られた壺や杯が一定量出土します。奥州市の胆沢扇状地にある角塚古墳の周辺には、このころの集落遺跡が数多く立地しており、中半入遺跡や石田I・II遺跡では、多量の赤彩土器が建物の中から出土しています。おそらく現代の我々と同じように、年中行事やハレの日の食事で使用したものと考えられます。5～6世紀の赤彩土器は、表面や内面全体に顔料を塗り付けて焼き上げました。



5～6世紀の赤彩土器
(奥州市石田I・II遺跡 杯と壺)

飛鳥時代の前半にあたる7世紀前半になると、太い横位条線文様を描いた赤彩土器や、器のほぼ中央部を赤く塗らずに、その上下を帯状に赤く塗り上げるものが出現します。しかも壺・高坏・脚付鉢など特定の器の口縁部～頸部に文様を描くようです。表面全体を赤く塗り上げる土器も継続して作られましたが、文様の描かれた土器が次第に増加していきます。

赤彩文様のある土器は、6～7世紀前半の東北南部や関東では見当たりません。7世紀前半の赤彩文様のある土器は東北北部独自のものと言えます。



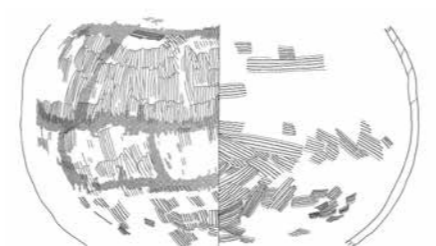
7世紀前半の赤彩土器
(左：奥州市今泉遺跡の高坏、右：栗原市泉谷館跡の壺)

続く7世紀後半の赤彩文様には、縦位条線も描かれるようになり、モチーフとして格子状の文様が出現します。下図(左側)のように壺の口縁部に太い縦位条線が等間隔に描かれます。



7世紀後半～8世紀前半の赤彩壺
(左：花巻市熊堂古墳群、右：宮古市津軽石大森遺跡)

また、器を縛ったかのような網掛け状文様もあります。格子状の多段化したものとも解釈できますが、どのようなイメージのもとに描かれたのかは不明です。これらの文様は奈良時代前半にあたる8世紀前半まで盛行したようです。



盛岡市台太郎遺跡の赤彩壺実測図

奈良時代後半にあたる8世紀後半には、細い2～数本組の縦位条線で格子文を描いた赤彩土器が隆盛します。一見、2本一対の条線は太い縦位条線を縁取りして、数条に分解したかのようにも見受けられます。北上市を中心とした和賀地方から数多く出土しており、特に北上川の自然堤防上の千刈遺跡と中村遺跡では赤彩土器の製作痕跡である土器焼成遺構も見つかっています。



8世紀後半～9世紀の赤彩壺
(北上市千刈遺跡)

平安時代にあたる9世紀に入ると、赤彩文様のある土器は次第に作られなくなります。明確な理由はわかりませんが、赤彩土器が葬送儀礼や年中行事と関連性があることから想定すると、エミシ(蝦夷)と呼ばれる東北北部の住民が、仏教を本格的に受け入れるようになったことで、既存の習俗が廃れ、仏教的儀礼方式に転換していったためと考えられます。

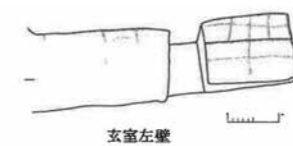
■7世紀前半の赤彩文様発生の背景

これまでに見てきた土器の赤彩文様が何を意味するのか殆ど分かっていません。格子文や横位文にどんな意味があるのかは今後の検討課題ですが、そのヒントが7世紀前半にあると考えています。

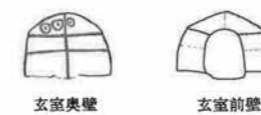
7世紀前半の赤彩文様は、東北地方北東部独自のもので、東北南部や関東ではこのような土器文化は見当たりませんが、

類似の赤彩文様が墳墓の横穴式石室や横穴墓の中に描かれています。これらの墓は一般に装飾古墳と呼ばれており、数は多くありませんが、宮城県や福島県等の東北南部にも造られました。

装飾古墳は九州地方で花開いた葬送文化で、石室内部を赤・白・緑・黒など多色で彩りますが、6世紀後半以降には東日本を中心に赤色主体となっていきます。東北南部の装飾古墳では格子文、渦巻文、同心円文、建物の柱材などを模したものの、珠文(点文)などが確認されていますが、いずれも赤色です。これらの文様の中で、格子文と珠文は東北北部の赤彩土器にも描かれています。その類似性から赤彩文様のある土器は、装飾古墳に係わる赤彩文化の影響を受けて成立したと考えられます。7世紀前半の東北北部の人々は、東北南部の葬送儀礼で使われていた文様を自分たちの文化に取り入れ、赤彩土器に装飾古墳文様とその効果を転嫁した、それが赤彩文様のある土器の発生原因ではないでしょうか。



玄室左壁



玄室奥壁

玄室前壁

宮城県山畑15号横穴の赤彩文様
(同心円文と柱・垂木表現らしき条線文)
(埋蔵文化財研究会ほか編2002『装飾古墳の展開資料集』より引用)

■赤彩文様の効果

葬送儀礼で必要とされた「文様の効果」は魔除けであり、魔には「災厄」「病氣」なども含まれます。装飾古墳に葬られた死者は、副葬品とともに石室内に安置され、入口は塞がれます。遺体は石室の中で朽ち果て、その過程で死穢の発生と供

養が必要になります。人々は祖先神を恐れ敬い、祟りの発生を防ぎつつ子孫繁栄と無病息災を祈願し、儀礼を欠かさなかったことでしょう。装飾古墳文様には祖先神を喜ばせることと同時に、祟りを封じる意味もあったでしょうが、装飾古墳文様が6世紀後半より前の多彩な色調から、それ以降の赤色に特化していく理由は、葬送儀礼において喜ばせることよりも、死穢の祟りへの対応(魔除け)を重視するためと考えられます。

東北北部の赤彩土器は、その思想を引き継ぎ、赤彩文様のある土器の大半が貯蔵具の壺であることから、壺の内容物に魔を寄せ付けない、すなわち穢れないことを祈るか、逆に穢れたものを封印する用途があったと推測されます。

■新しい赤色文化の流入

赤色＝魔除けが重視された背景には、飛鳥時代にあたる6世紀末頃、渡来人の頻繁な往来により大陸の赤色思想と風習が到来したと関係がありそうです。

6世紀に中国で書かれた『荆楚歲時記』に「冬至に赤豆を持って厄を払う」とあるように、このころの大陸では赤いもので厄を払うという思想がありました。その思想は渡来人たちの往来によって伝わり、さらに新たな疫病も大陸から流入します。伝統的な赤色が主に「弔いの色・行事の色」であったのに対し、大陸起源の新しい赤色思想は「赤＝魔除け・疫病除け」を重視したのです。この新たな赤色思想が、同時代の装飾古墳造営に影響を与え、東北北部にその思想が及ぶと、人々は赤色の御利益(効果)に預かるために赤彩文様のある土器を制作し始めたのではないのでしょうか。

■展覧会案内

テーマ展「古・岩手のクロガネ—発掘から見てきた古代～中世の鉄文化—」

会期 令和元年6月8日(土)～8月18日(日) 会場 特別展示室

岩手県は、近世から続く南部鉄器や世界遺産に登録された近代製鉄の始まりとなる橋野鉄鉱山跡、そして現代に至る釜石市の製鉄産業と鉄生産地として広く知られています。

当館では、鉄の歴史や文化をテーマとして、平成2年度に開館10周年記念特別企画「北の鉄文化」展を開催しましたが、当時の県内では、鉄生産関連遺跡の発掘調査事例も少なく、特に文献資料の乏しい古代～中世に関する究明は不十分なものでした。近年、沿岸部において三陸自動車道などの大規模開発を始め、東日本大震災に係わる復興関連の発掘調査により、古代～中世の鉄生産関連遺跡の発見が相次ぎ、調査事例が増えたことで様相が明らかとなってきました。

本テーマ展では、沿岸部の鉄生産関連資料を中心に、最新情報を紹介し、発掘成果から見てきた岩手の古代～中世の鉄生産の技術的変遷と系譜を辿ります。

プロローグ 鉄の由来

—国内の鉄使用と生産・加工の始まり—

現代社会に欠くことのできない鉄ですが、自然界では砂鉄や鉄鉱石などの鉱物中に、多くの不純物と共に酸化鉄としてあるため、これらを製錬して鉄を作る必要があります。

発掘調査成果からは、国内では縄文時代の終わりころ、朝鮮半島からの搬入品の使用が始まりとなります。弥生時代には鍛冶による製品加工が行われるようになり、古墳時代(6世紀代)には、先行した鉄器や鍛冶技術と同様のルートで、製鉄技術が北九州や中国地方に伝わったと考えられています。

この章では鉄の原料から生産の工程、そして表紙の立子山たたら製鉄の様子から操業の進行過程をご紹介します。

第I章 岩手の鉄使用の始まり

—製鉄技術伝播前の鉄—

県内で確認された最古の鉄は、弥生時代の終わりころの土墳墓(お墓)から出土した副葬品の鎌と刀子?の2点です。



長興寺I遺跡 土墳墓と鉄製品：(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供 以下、埋蔵文化財センター提供

製鉄技術の伝播前は、鉄は貴重品としてほとんどが搬入品でした。岩手が全国一の出土量を誇る藤手刀も大半が古墳の副葬品として埋納されていたものです。この章では権威の象徴的な藤手刀や数少ない実用鉄製品をご覧ください。



房の沢古墳 藤手刀【複製】 山田町教育委員会提供

第II章 岩手の製鉄の始まりと

技術の進歩

—発掘された古代～中世製鉄遺跡—

発掘により製鉄炉が確認された古代から中世の遺跡は、県内28遺跡、製鉄炉は111基に上ります。大半が閉伊地方、特に山田町と宮古市に集中しています。沿岸部に製鉄遺跡が多い最大の理由は、原料となる砂鉄資源が豊富なことで、砂鉄を含む花崗岩体が北上山地に広く分布することに起因すると考えられます。

6世紀後半以降、近世たたら(そけい)となる箱形炉が中国地方で発達し、8世紀後半には新たに豎形炉が伝播し、東日本では平安時代(9世紀)以降、豎形炉が主流となることが判明しています。

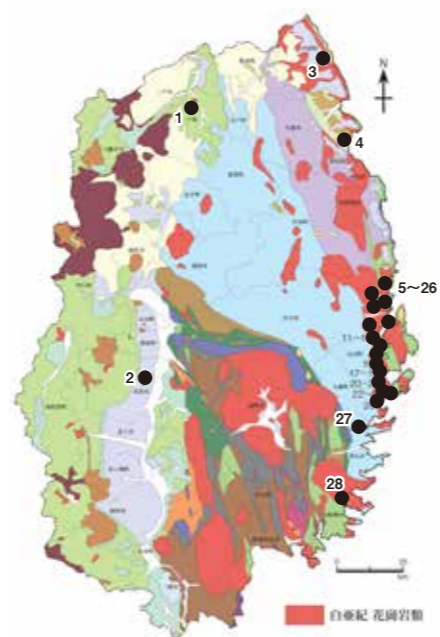


復元箱形炉：福島県文化財センター白河館提供 復元豎形炉 立子山たたら

県内の製鉄の始まりは、これまで平安時代(9世紀)以降と考えられていましたが、山田町の間木戸V遺跡で検出された豎形炉系の円筒形自立炉が、排滓場出土の土器からみて8世紀後半の可能性が考えられるものです。



山田町 間木戸V遺跡 4号製鉄炉跡(8c後半) 埋蔵文化財センター提供



● 調査された岩手の古代～中世製鉄遺跡

本章では、県内8世紀後半から15世紀までの製鉄遺構の立地・構造、製鉄炉の発達変遷と燃料供給のための炭窯について、写真パネルによりご紹介します。



田屋遺跡 SL15 製鉄炉(11c) 根井沢穴田IV遺跡 SXW03 製鉄炉(14c) 埋蔵文化財センター提供



島田II遺跡 炭窯 埋蔵文化財センター提供

第III章 岩手の古代～中世の

鉄器加工の様相

—発掘された古代～中世鍛冶遺跡—

県内で発掘により鍛冶炉が確認された古代から中世の遺跡は36遺跡、鍛冶炉は約300基に上ります。製鉄遺跡の数に比例して大半が沿岸部で見つかりました。

鍛冶には、製鉄で作った製錬鉄から不純物を除き、炭素分の調整を行う精錬鍛冶と、製鉄で作られた鋼や精錬された錬鉄から製品を作る鍛錬鍛冶の2工程があります。鍛冶炉は製鉄炉のような構造的な変化はほとんど見られませんが、精錬と鍛錬の併用炉から徐々に機能分化する傾向が認められます。

本章では、鍛冶遺構の構成や鍛冶炉の形を紹介し、国内で2例のみの古代の大規模鍛冶集落である島田II遺跡出土品を主とした資料をご覧ください。



島田II遺跡 SXW32 精錬鍛冶炉 島田II遺跡 SXW30 鍛錬鍛冶炉 埋蔵文化財センター提供



島田II遺跡 出土鉄製品 埋蔵文化財センター提供

第IV章 鉄生産技術の伝播と類似する

古代土器生産技術

—土師器と須恵器—

製鉄技術は、平安時代9世紀以降、律令体制下に入ったことで県内に広く普及することとなります。

県内で出土する須恵器は、奈良時代までは、鉄・鉄器と同様に搬入品でした。9世紀以降、胆沢城や志波城などの律令国家の古代城柵築造に関連し、ロクロや登り窯の須恵器製作技術が導入され、内陸部では自給できるようになりました。また、弥生土器の流れをくむ土師器もロクロで作られるようになります。

本章では、沿岸部の古代土器の移り変わりをご覧ください。



津軽石大森遺跡 出土土師器(8c前半) 埋蔵文化財センター提供

第V章 東北の古代～中世の

鉄生産関連遺構

—南・北東北の製鉄遺構の構造—

本章では、福島県・宮城県・秋田県・青森県の4県の古代から中世の製鉄炉や炭窯などを写真パネルでご紹介します。



堪忍沢遺跡 SN05～07 製鉄炉 秋田県埋蔵文化財センター提供

第VI章 岩手の製鉄技術の系譜

—製鉄炉の構造発達から見える伝播—

本章では、県内の製鉄遺構と東北地方の製鉄遺構の構造について比較し、製鉄技術の発達の系譜を辿ってみます。

エピローグ 岩手の近世たたら

—発掘された岩手の近世たたら遺跡—

古代～中世の製鉄遺跡に比べ、発掘調査の少ない近世たたら遺跡ですが、本章では数少ない発掘された南部鉄山と伊達焔屋のたたら炉をご紹介します。

おわりに

発掘調査で得られる資料には、昔の人々の活動痕跡として地面に掘られた遺構と道具類として残る遺物があります。

遺構は持ち運びできず、調査が終わると開発工事により失われてしまいます。

本テーマ展では、古代から中世の鉄生産について、今では写真でしか見ることのできない遺構にスポットをあてた展示となっております。2度と実物の見られない資料ですが、ぜひご覧ください。

(学芸第一課長 小山内透)

■活動レポート

チャレンジ! はくぶつかん

当館では毎月第2,3土日（※詳細はHPをご覧ください）の開館時間、主に小学生を対象に「チャレンジ! はくぶつかん」を行っています。これは、館内の展示資料を見ながらクイズに挑戦するというもので、毎月異なるテーマで問題が作られています。まず、総合受付で「チャレンジシート」を受け取り、シートの内容にそってクイズに答えます。また、展示資料付近にはチャレンジマークが貼ってあり、何色のマークなのかもチェックポイントとなりますので、広い館内でも楽しみながら進めることができます。

この「チャレンジ! はくぶつかん」に挑戦するとスタンプカードがもらえます。スタンプが4個たまるごとに素敵な文房具と交換できます。

そして、毎月挑戦して12ヶ月分すべてのスタンプがたまると、3月の来館時に皆勤賞の表彰が行われ、記念品をプレゼントしています。

平成30年度は昨年度よりも2人多い15人の皆さんが最優秀チャレンジャー（皆勤賞対象者）となりました。

★☆☆おめでとうございます★☆☆

7回目	細越 空さん	
5回目	伊藤桃子さん	小原碧生さん
4回目	篠田典子さん	
2回目	大林志聞さん	
1回目	原 慶期さん	吉田 楓さん
	福田崇文さん	滝村菜々子さん
	小原 杏さん	小原 蘭さん
	櫻田千夏さん	櫻田真尋さん
	櫻田悠悟さん	小笠原多映さん

参加は随時自由です。最優秀チャレンジャー目指して博物館を探検してみませんか？



皆勤賞賞状授与の様子

※最優秀チャレンジャーの皆さんの表彰風景は館内2階のミニプラザ掲示板にてご紹介させていただいております（許可をいただいたもののみ）。

（主任専門学芸員 近藤良子）

■活動レポート

平成30年度文化財等取扱講習会

開催日 平成31年1月30日(木)～2月1日(金)

岩手県内の市町村教育委員会や博物館等施設、岩手デジタルミュージアム構築事業実行委員会構成機関に所属する文化財担当者を対象に文化財等取扱講習会を実施いたしました。県内から28名の方が参加し、当館の職員が中心となって講師を務めました。

1日目と2日目の午後に、文化財科学、歴史、地質、生物、考古、民俗、古美術の資料取扱基礎の講義を行いました。取り扱う資料が施設ごとに異なるため、興味関心は受講者によって様々でしたが、基本的知識・作業として知っておくべき内容ということで好評でした。

2日目の午前には、施設内の空気環境や事業を進めるにあたっての取り組みなどの情報交換、意見交換がなされました。

各施設とも限られた環境・予算等の中で、日頃工夫している点などを出してもらったことで、課題解決や今後の事業のあり方・進め方の参考となったようです。

最終日には、文化財等資料の調査作成のあとに外部講師による資料梱包の実技、写真撮影の実技を行いました。資料梱包については、日本通運株式会社的美術品事業部の方に、写真撮影についてはみどり光学社の方に講師をお願いしました。受講者からは、これらの実技講習に対する評価がもっとも高く、次年度以降の継続を望む声も多かったものとなりました。

今回の講習会を通して、当館でも他館の課題や新たな工夫を知ることができ、大変参考になりました。また、市町村・

各施設の文化財担当者がかかえる、日々の様々な課題に対する解決策の一助となったのではないのでしょうか。

このような取組みにより、岩手の宝である文化財資料や調査結果が、県民の皆様をはじめ一人でも多くの方々に還元できることにつながりましたら幸いです。

（学芸第二課長 木戸口俊子）



2人1組による資料梱包の実技講習

■事業報告

トピック展「今を生きる恐竜たち」

会期 平成31年2月26日(火)～4月7日(日) 会場 グランドホール(正面階段)

学校が春休みを迎える時期に合わせ、子どもたちが好きな「恐竜」をテーマにトピック展を開催しました。といっても、中生代に繁栄し、化石となった恐竜たちではなく、私たちと同じ時代を生きる恐竜、すなわち鳥を中心とした展示です。

化石で知られる恐竜たちと鳥が同じグループの生物であることは、最近出版された子ども向けの恐竜図鑑などでも解説されています。しかし、まだまだ知らな



目玉展示のマダラハゲワシ

い方も多いようなので、このトピック展で鳥を「恐竜」として紹介することにしました。

「世界一高く飛ぶ恐竜」として紹介したマダラハゲワシはアフリカにすむ大きな鳥で、高度11,300メートルで飛行機と衝突した記録があります。展示した剥製は翼を広げた凛々しい姿で、幅2メートル、高さ1.8メートルと見栄えのする立派なものです。岩手とゆかりがなく、長らく「お蔵入り」していましたが、ようやくお見せする機会が得られました。

冬に訪れるオオハクチョウは、身近な野生恐竜の中では最大級のサイズです。見慣れている感じがしますが、間近で見るとその大きさに改めて驚かされます。

剥製は正面階段に常設している恐竜化



階段踊り場に展示したオオハクチョウ

石の間に展示しました。さすが同じ仲間同士、常設してもよさそうなほどなじみましたが、玄関が近く標本害虫が入り込みやすい場所なので、虫が活動を始める季節の前に予定通り終了しました。

企画展やテーマ展とともに、今後開催されるトピック展にもどうぞご期待ください。

（専門学芸調査員 渡辺修二）

■事業報告

冬の写生会

写生会 平成30年12月15日(土)～平成31年1月14日(日) 作品展示 平成31年1月19日(土)～平成31年2月11日(月・祝)

冬休み期間に合わせ、毎年開催している「冬の写生会」。今年もたくさん子どもたちが参加してくれました。

博物館から見える美しい景色や展示資料を描くことで、それらにより興味をもってもらい、博物館を更に楽しんでほしいという思いから始まったこのイベント。毎年、どんな作品を見られるのか、職員も楽しみにしています。

クレヨンを持参してやる気満々の子や、当日受付で勧められて、はにかみながら参加する子など様々ですが、いざ絵を描き始めると、皆真剣そのもの！一緒に来たお父さんやお母さんが「もう、いいんじゃない？帰ろうよ。」と言っても、「まだ描きたい！」と、細部まで描き込む子もいました。



楽しい作品がいっぱい！冬の写生会作品展示会

例年、マメンキサウルスなど、恐竜が描かれることが多いのですが、今年はチャグチャグ馬コも人気でした。晴れた日が多く、眺めが良かったからでしょうか、雄大な岩手山を描くお友達も多かったです。

1月19日から、作品を2階のミニプラザ壁面に展示しました。丁寧に描かれ

た作品やカラフルで想像力あふれる作品など、個性的な36作品が、来館者の目を楽しませてくれました。

作品展示期間は、毎年、ミニプラザが楽しい雰囲気になります。見学の合間、足を止めてじっくり見る方、「かわいらしい絵だね。」「あ、〇〇ちゃんの絵が飾ってあるよ！」と親子で感想を口にする方、お孫さんの絵を見に来たという方…。たくさんの方々に、作品をご覧いただきました。

博物館でお絵描きするという、いつもとはちょっと違った楽しみ方ができる「冬の写生会」。次回もどうぞお楽しみに。参加してくれたお友達、どうもありがとうございました。

（総務課 小野寺聡美）



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション 〈令和元年6月1日～令和元年9月30日〉

お知らせ

●夏の臨時開館

令和元年7月29日(月)、8月5日(月)、8月13日(火)は臨時開館します。

●資料整理に伴う休館

令和元年9月1日(日)～令和元年9月10日(火)は資料整理のため休館します。

●敬老の日 65歳以上入館無料

令和元年9月16日(月・敬老の日)は65歳以上の方は無料で入館できます。

展覧会

●テーマ展「古・岩手のクログネー発掘から見えてきた古代～中世の鉄文化～」

令和元年6月8日(土)～8月18日(日) 2階 特別展示室

復興関連調査等で見えてきた中世以前の岩手の鉄文化。沿岸部の資料を中心に最新情報を紹介します。

※ 詳細は本文p.4-5 展覧会案内記事をご覧ください。

◆展示解説会

6月30日(日) 7月21日(日) 8月3日(土) 14:30～15:00

2階特別展示室

当館学芸員が展示中の資料について解説します。(要入館料)

◆県博日曜講座

7月14日(日) 13:30～15:00 地階 講堂 聴講無料

「岩手の古代～中世鉄生産の系譜」 講師：小山内透(当館学芸課長)

◆考古学セミナー講演会 ※県博日曜講座を兼ねます

7月28日(日) 13:30～15:00 地階 講堂 聴講無料

「古代東北の鉄生産―陸奥国南部を中心に―」 講師：能登谷宣康氏(公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部 副主幹)

◆製鉄実演

8月4日(日) 9:00～16:00 正面玄関前 見学無料

実演講師：留畑昌市氏(元金石市鉄の歴史館館長)

※雨天中止(前日雨天の場合も準備の都合上中止)

●三陸防災復興プロジェクト2019 三陸ジオパークワクワクフェスタ

岩手の海とジオの魅力展

国立科学博物館・岩手県立博物館・コラボミュージアム

「生命のれきしー君につながるものがたり」

6月2日(日)～6月16日(日) 岩泉町小本津波防災センター (入場無料)

6月22日(土)～7月15日(月・祝) 大船渡市立博物館 (要入館料)

38億年前の地球最古の岩石、ようやく現れたエディアカラ生物の化石、恐竜の全身骨格などの標本・資料と一緒に地球のれきし・生命のれきしをたどる46億年のものがたりへご招待します。

●企画展「よろい・かぶと・かたなの世界」

令和元年9月21日(土)～11月24日(日) 2階 特別展示室ほか

武家の力を示すものとして現代に伝えられる甲冑、刀剣、刀装具などを紹介します。

※詳しくは当館ホームページをご覧ください

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

* 展覧会関連講座

6月 9日「ストーンサークルの謎―縄文時代のモニュメント―」

講師：濱田宏(当館学芸課長)

6月23日「吉田松陰が認めた男―那珂栲楼の思想―」

講師：武田麻紀子(当館学芸員)

* 7月14日「岩手の古代～中世鉄生産の系譜」

講師：小山内透(当館学芸課長)

* 7月28日「古代東北の鉄生産―陸奥国南部を中心に―」

講師：能登谷宣康氏

(公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部 副主幹)

8月11日「生き物供養碑―生き物の魂を弔う―」

講師：近藤麻子(当館学芸員)

8月25日「生命史をひも解く―三畳紀―」 講師：望月貴史(当館学芸員)

* 9月22日「大名と甲冑―盛岡藩を中心に―」 講師：原田祐参(当館学芸員)

観察会・見学会(事前申込制)

◆第77回地質観察会「久慈市周辺に見られる晩新統の地層と化石」

令和元年7月7日(日) 10:00～15:30

於、久慈市 現地集合・解散

久慈市の周辺に分布する古第三紀晩新世の地層や化石の観察を行います。

講師：堀内順治氏(東京学芸大学附属国際中等教育学校)

定員：20名(小学校高学年以上、要保護者承諾)

参加費：100円(障害保険料)

募集期間：6月5日(水)～6月15日(土) 定員充足しだい締切

◆第77回自然観察会「見つけよう! 夏の虫たち」

令和元年7月28日(日) 10:00～14:30

於、滝沢市相の沢キャンプ場 現地集合・解散

鞍掛山のふもとで、色々な虫たちと出会いましょ。

講師：千葉武勝氏(当館研究協力員)

定員：20名(小学生以上) ※要事前申し込み。定員充足しだい締切。

参加費：100円(傷害保険料)

募集期間：6月18日(火)～7月3日(水)

※地質観察会・自然観察会は申し込み専用電子メールまたは往復ハガキで先着順に受け付けます。詳しくはお問い合わせ下さい。

◆ナイトミュージアム～くらやみの中から語りかける資料をさぐる

令和元年8月9日(金)・10日(土) 16:30～17:30

ふだんは見られない、閉館後の展示室を学芸員といっしょに歩いて新しい発見をしてみませんか?

定員：各日30名(小学生～中学生とその保護者) 懐中電灯を各自で準備

※要事前申し込み(先着順・定員充足しだい締切)

募集期間：7月24日(水)～7月30日(火)

申込方法：9:30～16:30の開館時に来館、または電話にて。

週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30～15:00頃 前後 講堂 当日受付 視聴無料

○6月1日 テーマ展関連 鉄 (合計78分/一般向け)

「南部鉄瓶」(記録/20分)

「県政ニュース 昭和60年 この一年」(ニュース/14分)

「県政ニュース 昭和55年 完成した県立博物館」(記録/14分)

「ふるさと岩手」(記録/30分)

○7月6日 夏休み直前アニメスペシャル

「アテルイ」(アニメ/93分/小学生～一般)

○8月3日 夏休み映画

「ぞう列車がやってきた」(アニメ/80分/小学生～一般)

◆チャレンジ!はくぶつかん

毎月第2・第3土曜日、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

6月 8日・9日・15日・16日 テーマ：衣(い・ころも)

7月13日・14日・15日・20日・21日 テーマ：鉄(てつ)

8月10日・11日・12日・17日・18日 テーマ：青(あお)

9月14日・15日・16日・21日・22日・23日 テーマ：旅(たび)

チャレンジ!マークをさがして はくぶつかんをたんけん!

◆たいけん教室～みんなでためそう～(事前申込制)

毎週日曜日 13:00～14:30 幼児(3歳以上で保護者同伴)・小学生20名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。

※全プログラム有料です(材料費代/プログラムごと異なります)。

※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30～16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

※9月15日「3Dメガネで万華鏡」の予約受付は8月25・27～31日および9月11～15日に行います。

6月	2日	チャグチャグ馬コづくり	7月	7日	ミニさんさだいで
	9日	草花のそめもの		14日	ミニさんさだいで
	16日	お絵かきはんこ		21日	土器づくり
	23日	ばねのキツツキおもちゃ		28日	ミニさんさだいで★
	30日	スライムであそぼう			
8月	4日	ちぎり絵のうちわ★	9月	1日	おやすみ
	11日	天然石のフォトフレーム★		8日	おやすみ
	18日	化石のレプリカ		15日	3Dメガネで万華鏡
	25日	お月見かざり		22日	まが玉アクセサリー
				29日	手づくり万華鏡

★印の日は午前(10:00～11:30)と(13:00～14:30)の2回実施します。

定時解説

平日～土曜日 13:30～14:30 / 日曜日 10:30～11:30

解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご要望におこたえしています。

※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。

利用のご案内

■開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)

年末年始(12月29日～1月3日)

■入館料 一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料

()内は20名以上の団体割引料金

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第161号 令和元年6月1日発行	編集	岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214
	発行	公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595